

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十八年七月二十三日(土曜日) 午後六時三十分開演

演目解説 (金沢能楽美術館学芸員 山内 麻衣子)

狂言 仏師(ぶっし)

仏像を買いに都へ出た田舎者が真仏師を名乗るすっぱにすり寄られ、それでも田舎者の無知とすっぱのでたらめは、不思議に会話をはずませて、結局、翌日に身の丈ほどの吉祥天女を買い取る商談が成立します。約束の時分、約束の場所へ田舎者が出向きますと、なるほど身の丈ほどの仏が完成していましたが、これはすっぱが扮したものです。仏と二役の偽仏師が注文に応じて仏の形を変えらるうちに、変わり身が追い付かず正体が露見します。

能 龍田(たつた)

秋も暮れ過ぎた霜降月のある日、奈良から河内の国へ向かう経聖の一行(ワキ・ワキツレ)が龍田川を渡ろうとすると、「川に散り浮く紅葉の錦を渡ることで裁ち切れば神と人の仲も絶えましよう。それは薄氷が張る冬の川でも同じことです」と言って行く手をさえぎる女(前シテ)がいます。女は巫女を名乗り聖を龍田明神に案内します。冬枯れの社頭の木立の中に色鮮やかな盛りりの紅葉が一本あって、これを神木と聞いた聖は紅葉を幣として神前に手向けます。宮巡りをするうちに巫女は龍田姫を名乗り、光を放ち紅の袖を被いて社壇に入ります(中入)。やがて通夜する聖の前に太陽が輝くような奇跡が実現します。神官の打つ鼓の音と共に御殿が鳴動し、光まばゆい御神体(後シテ)が現れました。国を守り民を豊かにする龍田の神は、代々の歌人に紅葉を詠まれてきたことを思い、夜神楽に時を忘れて紅葉を幣、時雨を鈴、波を白木綿とする祝詞をあげた後、昇天します。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附

前シテ (巫女) 鬘をつけ、鬘帯をしめ、泣増の面をかける。

後シテ (龍田姫) 黒垂をつけ、天冠をいただき、泣増の面をかける。